日本語と中国語における「一」の機能について

馮　一峰（上智大学大学院言語科学研究科）

日本語の「一」は、動詞連用形や動名詞の前に現れることができ、中国語の「一」は、動詞重複語の間や動詞の前に現れることができる。本研究の目的は、日本語の「一動詞連用形／動名詞する」構文における「一」の機能と中国語の動詞重複語の間や動詞の前に現れる「一」の機能を比較し、その共通点と相違点に統辞的な説明を与えることにある。

日本語の「一動詞連用形／動名詞する」構文における「一」は、中国語の動詞重複語の間に現れる「一」と同じく「少し」「少しの間」という意味を付け加えることができるので、同じく事象の有界性を明示する機能を果たしていると考えられる。

それに対し、中国語の動詞の前に現れる「一」は、必ずしも「少し」「少しの間」という意味を付け加えるわけではなく、後続する表現によって「事象が発生する」という意味のみを表すこともできるので、事象全体の有界性に加えて、事象の発生時点のみを明示する機能を果たすこともできると考えられる。

中国語の動詞の前に現れる「一」と日本語の「一動詞連用形／動名詞する」構文における「一」や中国語の動詞重複語に現れる「一」との機能の違いは、「一」の統辞位置の違いによって説明されると考えられる。「午後の一眠り」のような表現があるので、日本語の「一」は、動詞連用形や動名詞と共に複合名詞を成すと考えられる。そして、太田（1987）は、古代中国語の“A 一 A”型動詞重複語の“一 A” の後ろに名詞化を示す“儿”が付け加えられた例があるので、“一 A”の部分は、前の動詞の補部であり、複合名詞として使われていたと指摘している。しかし、現代中国語の“A 一 A”型動詞重複語は、補部を取ることができるので、一つの動詞を成していると考えられる。したがって、「一泳ぎする」や“想一想”（想：考える）などは次のような構造を持っていると考えられる。

（1）a. 一泳ぎする：[$_{V}$ [$_{N}$ 一泳ぎ] [$_{V}$ する]]

b. 想一想：[$_{V}$ [$_{V}$ 想] [$_{N}$ 一想]]

Tsai（2008）は、中国語には不完全効果（incompleteness effects）という現象があるため、アスペクト解釈位置について、次のような提案をしている。

（2）[$_{TP}$ T [$_{AspP1}$ Asp1 [$_{vP}$ v [$_{AspP2}$ Asp2 [$_{VP}$ V- Asp3]

不完全効果は、Asp-to-T 上昇によって解消され、また Asp1 の位置にある要素しか上昇することはできないと指摘されている。「一」が動詞の前に現れる文においては、不完全効果が見られるため、「一」は Asp1 の位置にはない。そして、付加詞が「一」の前後に現れることができるので、「一」は、Asp3 ではなく、Asp2 の位置にあると考えられる。

中国語の動詞の前に現れる「一」は、Asp2 の位置にあるため、VP を C 統御し、VP 全体をスコープとして取っている。三原（2004）では、vP が動作主による意図的働きかけを示し、VP が動作の開始（及び、その後の継続・終了）を示すと指摘されている。したがって、VP 全体をスコープとして取っている「一」は、事象全体の有界性に加えて、事象の発生時点も明示できる。それに対し、日本語の「一動詞連用形／動名詞する」構文における「一」と中国語の動詞重複語に現れる「一」は、複合名詞の節点 N の下の位置にあるので、VP を C 統御せず、事象の発生時点のみを明示することはできないと考えられる。